

臨床実地問題 50問(解答時間2時間)

1 眼球の組織像を別図1に示す.

機能はどれか.

- a 房水の产生
- b 瞳孔径の調節
- c 血液網膜関門
- d 視細胞外節の貪食
- e 角膜透明性の維持

2 10歳の男児. 矯正視力は両眼ともに1.2. 2型2色覚と診断されている. 石原色覚検査表の第1表を別図2に示す.

男児はこの表をどう読むか.

- a 読めない
- b 1または2
- c 12
- d 18
- e 28

3 隅角写真を別図3に示す.

正しい組合せはどれか. 2つ選べ.

- a ①—隅角離開
- b ⑤—隅角結節
- c ③—周辺虹彩前癒着
- d ④—生理的隅角血管
- e ⑥—Sampaolesi線

4 58歳の女性. 眼底検査で異常を指摘されて, 視野検査を受けた. 眼底写真を別図4に示す.

推定される視野検査の結果で正しいのはどれか.

- a 中心暗点
- b 輪状暗点
- c 鼻側階段
- d 求心性視野狭窄
- e 下半視野の異常

5 OCT所見を別図5に示す.

正しいのはどれか. 2つ選べ.

- a 厚い黄斑前膜がみられる.
- b 黄斑浮腫は漿液性網膜剝離による.
- c 黄斑浮腫は中心窩の鼻側よりも耳側で顕著である.
- d 囊胞様黄斑浮腫は視神経乳頭黄斑線維束に著明である.
- e 中心窩を中心とする直径1mm内の平均網膜厚は526μmである.

6 31歳の女性. 右眼の霧視と充血を自覚したため来院した. 配偶者が駆梅療法を受けている. STS法, TPHA法はいずれも陽性. 右眼前眼部写真を別図6に示す.

保健所への届け出で正しいのはどれか.

- a 直ちに届け出を行う.
- b 7日以内に届け出を行う.
- c 1ヶ月以内に届け出を行う.
- d 定点医療機関であれば届け出を行う.
- e 届け出を行う必要はない.

7 生後1か月の乳児. 生来右眼の内側部に隆起があり, 眼脂もみられる. 精査目的で来院した. 外眼部写真と頭部MRI画像を別図7A, 7Bに示す.

診断はどれか.

- a 血管腫
- b 涙腺腫瘍
- c リンパ管腫
- d 眼窩蜂巣炎
- e 先天性涙嚢ヘルニア

8 67歳の男性. 左眼の腫瘤を主訴に来院した. 前眼部写真を別図8に示す.

適切な処置はどれか.

- a 穿刺排膿
- b 化学療法
- c 放射線治療
- d 眼窩内容除去術
- e 切除とヘルニア門閉鎖

9 48 歳の女性。両眼の眼瞼腫脹を訴えて来院した。顔面写真と眼窩冠状断 MRI の STIR 画像を別図 9A, 9B に示す。血中 IgG4 は 850 mg/dl。生検は拒否された。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b ステロイド局所注射
- c ステロイド内服
- d ステロイド大量点滴静注
- e ステロイドバルス療法

10 50 歳の女性。1か月前から物が二重に見えるため来院した。半年前から左眼眼球突出を家族に指摘されているが痛みはない。左眼眼球突出と下方偏位および上転障害を認める。矯正視力は両眼ともに 1.2。前眼部と中間透光体および眼底に特記すべき所見はない。眼窩 MRI 画像を別図 10 に示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b 生検
- c 放射線療法
- d 経眼窩壁腫瘍摘出術
- e 副腎皮質ステロイド内服

11 38 歳の男性。以前から結膜の異常に気付いていたが放置していた。最近異物感が強くなったため来院した。前眼部写真と試験切除の病理組織像を別図 11A, 11B に示す。

診断はどれか。

- a 結膜乳頭腫
- b Meibom 腺癌
- c 結膜上皮内癌
- d 結膜リンパ腫
- e 結膜悪性黒色腫

12 67 歳の女性。左眼のみ緑内障点眼薬を継続していたが、最近、眼瞼の違和感を訴えて来院した。前眼部写真を別図 12 に示す。

この患者が点眼していた薬剤はどれか。

- a 交感神経 β 遮断薬
- b 副交感神経刺激薬
- c 交感神経 $\alpha\beta$ 遮断薬
- d 炭酸脱水酵素阻害薬
- e プロスタグラジン関連薬

13 6 歳の女児。右眼瞼下垂を主訴に来院した。口を閉じている時と開けている時の写真を別図 13 に示す。

正しいのはどれか。

- a 瞳孔不同を伴う。
- b 顔面の発汗異常を伴う。
- c 眼輪筋の先天異常である。
- d 視覚刺激遮断弱視の危険性が高い。
- e 眼瞼拳筋と外側翼突筋の異常連合が原因である。

14 8 歳の男児。近医で左眼の結膜下腫瘍を指摘され、紹介されて来院した。左眼前眼部写真と病理組織像を別図 14A, 14B, 14C に示す。

診断はどれか。

- a リンパ腫
- b 多形腺腫
- c 扁平上皮癌
- d 皮様脂肪腫
- e 脂肪ヘルニア

15 38 歳の男性。右眼の視力低下を主訴に来院した。右眼矯正視力は 0.7。右眼細隙灯顕微鏡写真と角膜前面屈折力マップおよび角膜厚マップを別図 15A, 15B に示す。

正しいのはどれか。

- a 遺伝性疾患が疑われる。
- b 角膜倒乱視を生じている。
- c 角膜移植の予後は良好である。
- d 視力低下が進行する可能性は低い。
- e 膜原病などの全身検査を行うべきである。

16 78 歳の男性。近医で角膜混濁を指摘されて来院した。初診時の細隙灯顕微鏡写真とフルオレセイン生体染色写真を別図 16A, 16B に示す。

最も疑われるのはどれか。

- a 角膜ヘルペス
- b アミオダロン角膜症
- c 薬剤性角膜上皮びらん
- d Thygeson 点状表層角膜炎
- e Reis-Bücklers 角膜ジストロフィ

17 5歳の女児。右眼の視力不良を主訴に来院した。視力は右 0.1(0.2×+3.00 D ⊖ cyl-3.00 D Ax 5°), 左 1.2(矯正不能)。眼鏡処方と遮閉訓練を行っているが右眼の視力は向上しない。細隙灯顕微鏡写真と角膜屈折力マップおよび眼球の高次収差マップを別図 17A, 17B に示す。

正しいのはどれか。

- a 角膜倒乱視がある。
- b 角膜不正乱視がある。
- c 水晶体不正乱視がある。
- d ハードコンタクトレンズを処方する。
- e 角膜移植を行う。

18 18歳の男子。文字が読みにくいと訴えて来院した。視力は右 0.1(0.3×-1.00 D ⊖ cyl-0.50 D Ax 180°), 左 0.09(0.15×-1.00 D ⊖ cyl-0.50 D Ax 175°)。左眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真および OCT 像を別図 18A, 18B に示す。

誤っているのはどれか。

- a 両親のどちらかに同様の眼底がみられる。
- b 遺伝子検査が診断に有用である。
- c 周辺視野はほぼ正常である。
- d 全視野 ERG はほぼ正常である。
- e 視力はさらに低下する可能性がある。

19 7歳の男児。3歳児健診で両眼の低視力を指摘され、以来眼鏡を装用している。その後も視力が改善しないため来院した。視力は右 0.1(0.4×+1.00 D ⊖ cyl-2.50 D Ax 10°), 左 0.2(0.5×+1.50 D ⊖ cyl-2.00 D Ax 170°)。両眼の眼底写真と OCT 像および右眼の全視野 ERG の結果を別図 19A, 19B, 19C に示す。

診断はどれか。

- a 先天網膜分離症
- b 杆体 1 色覚(全色盲)
- c 先天停在性夜盲の完全型
- d 先天停在性夜盲の不全型
- e S錐体 1 色覚(青錐体 1 色覚)

20 1歳7か月の男児。半年前から目の位置が不自然であることに両親が気付き、来院した。出生は在胎 41 週、体重 3,210 g で正常分娩。右眼眼底写真と超音波 B モード像を別図 20A, 20B に示す。左眼に異常はみられない。

適切な対応はどれか。2つ選べ。

- a 眼窩 X 線 CT 検査
- b 針生検
- c 網膜冷凍凝固
- d 全身化学療法
- e 抗菌薬全身投与

21 11歳の男児。3年前から両眼の視力低下を指摘されて来院した。視力は右 0.1(0.4×-2.50 D), 左 0.1(0.4×-2.75 D)。身長 142 cm, 体重 49 kg。小児科で精神発達遅滞と性腺発育不全を指摘されている。両眼の眼底写真と Goldmann 視野検査の結果を別図 21A, 21B に示す。

診断はどれか。

- a Niemann-Pick 病
- b Goldmann-Favre 病
- c Ehlers-Danlos 症候群
- d Bloch-Sulzberger 症候群
- e Laurence-Moon-Bardet-Biedl 症候群

22 5名の患者の OCT 像を別図 22 に示す。

抗 VEGF 薬による治療の適応となるのはどれか。2つ選べ。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

23 別図 23 は正常眼の所見である。

この検査法で正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 光源として赤色光を用いる。
- b Stargardt 病では dark choroid を示す。
- c リポフスチンの多寡で所見が変化する。
- d 若年者では後極部全体が明るく観察される。
- e 網膜色素上皮細胞の欠損部は暗く観察される。

24 20歳の男性。ラグビーの試合でスクランムを組んでいたところ、左眼の視力が急に低下して来院した。視力は左 0.2(矯正不能)。眼圧は左 14 mmHg。前眼部と中間透光体に異常はない。左眼眼底写真を別図 24 に示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b ベット上安静
- c 頭部 X 線 CT 検査
- d 前房穿刺
- e 硝子体手術

25 48 歳の男性。1 年前に全身の悪性リンパ腫と診断され、化学療法中である。左眼の霧視を自覚したため来院した。前眼部に炎症所見はない。左眼眼底写真を別図 25 に示す。

治療はどれか。

- | | | |
|-----------------|------------------|--------------|
| a 抗結核薬内服 | b アシクロビル点滴静注 | c 抗真菌薬硝子体内注射 |
| d ガンシクロビル硝子体内注射 | e メトトレキサート硝子体内注射 | |

26 46 歳の男性。数か月前から右眼に霧視があり、悪化したため来院した。視力は右 0.1(0.2 × +16.00 D ⊖ cyl -1.00 D Ax 180°), 左 0.1(0.3 × +17.00 D ⊖ cyl -1.50 D Ax 180°)。眼圧は右 15 mmHg, 左 12 mmHg。右眼眼底写真と超音波 B モード像を別図 26A, 26B に示す。

治療はどれか。

- | | | |
|----------------------|-----------------|------------|
| a 副腎皮質ステロイド後部テノン嚢下注射 | b 副腎皮質ステロイド全身投与 | c 硝子体内ガス注入 |
| d 強膜開窓術 | e 強膜内陥術 | |

27 28 歳の男性。1 週前から両眼のかすみを自覚して、近医を受診した。眼底出血を指摘され加療目的で紹介された。身長 172 cm, 体重 82 kg。高血圧と高脂血症および糖尿病の既往はない。矯正視力は両眼ともに 0.9。両眼の眼底写真と OCT 像を別図 27A, 27B に示す。

この症例で直ちに行うのはどれか。

- | | | |
|-------------|----------|--------------------------|
| a 血液検査 | b 蛍光眼底造影 | c トリアムシノロンアセトニド後部テノン嚢下注射 |
| d 抗 VEGF 療法 | e 汎網膜光凝固 | |

28 65 歳の男性。1 週前に川にかかる鉄橋が傾いて見えるのに気付き、自分で描いた見え方の絵を持参して来院した。外傷の既往はない。2 年前から糖尿病の治療を受けている。持参した絵を別図 28 に示す。

正しいのはどれか。

- | | |
|--------------------------|------------------------|
| a 左眼上斜視である。 | b 右眼は内方回旋をしている。 |
| c 頸を左に傾けると症状は軽快する。 | d 自然治癒の可能性は 50% 以下である。 |
| e プリズムによる治療は右にベースアップで貼る。 | |

29 34 歳の女性。左眼の疼痛と眼瞼下垂を訴えて来院した。前眼部写真と Hess 赤緑試験および頭部 MRI 画像を別図 29A, 29B, 29C に示す。

正しいのはどれか。

- | | | |
|--------------------|---------------|---------------|
| a 耳鳴がある。 | b 下方視時に複視がある。 | c 脈波の増大がみられる。 |
| d 副腎皮質ステロイドの内服を行う。 | e 再発はまれである。 | |

30 63 歳の女性。数年前から右眼の眼位異常を指摘され、治療を希望して来院した。9 方向眼位写真と頭部 MRI 画像を別図 30A, 30B に示す。

正しいのはどれか。

- | | | |
|---------------|------------------|--------------|
| a 共同性の斜視である。 | b 外眼筋の欠損がある。 | c 異常神経支配がある。 |
| d 筋付着部の異常がある。 | e 機械的な眼球運動制限がある。 | |

31 68 歳の女性。2 週前の起床時に右眼が暗く見え、改善しないため来院した。視力は右 0.4(矯正不能), 左 0.7(1.0 × +0.75 D)。前眼部と中間透光体に異常はない。右眼眼底写真と Humphrey 視野(30-2 プログラム)検査の結果を別図 31A, 31B に示す。血沈と CRP に異常はない。

正しいのはどれか。

- | | |
|---------------------|----------------------|
| a 右眼に眼球運動時痛を認める。 | b MRI で右視神経に異常を認めない。 |
| c ステロイドパルス療法を行う。 | d 視力低下と視野障害は進行する。 |
| e 1 か月以内に反対眼の発症を来す。 | |

32 76歳の女性。眼瞼下垂を主訴に呼吸器内科から紹介された。顔面の赤外線写真を別図32に示す。

診断に有用な点眼薬はどれか。

- a 0.01%ブナゾシン塩酸塩
- b 0.1%ブリモニジン酒石酸塩
- c 1%アラクロニジン塩酸塩
- d 1%ピロカルピン塩酸塩
- e 5%フェニレフリン塩酸塩

33 Goldmann圧平眼圧測定時の細隙灯顕微鏡写真を別図33に示す。

眼圧測定時の正しい位置はどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

34 40歳の女性。健診で異常を指摘されたため来院した。視力は両眼ともに1.2(矯正不能)。眼底写真とOCTの結果を別図34A, 34Bに示す。

正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 進行することが多い。
- b 乳頭の発達異常である。
- c 緑内障治療薬を点眼する。
- d 視神経乳頭の上方にノッチを認める。
- e 視神経乳頭血管起始部が上方にシフトしている。

35 75歳の女性。夕方から右眼眼痛と視力低下を自覚していたが、徐々に痛みが増強し、激しい頭痛と嘔吐を伴うため、深夜に救急外来を受診した。眼圧は右64mmHg, 左12mmHg。右眼前眼部写真を別図35Aに示す。既往は特にない。治療経過中に撮影された前眼部OCT像を別図35Bに示す。

治療による経過で正しいのはどれか。

- a ① → ② → ③
- b ① → ③ → ②
- c ② → ① → ③
- d ③ → ① → ②
- e ③ → ② → ①

36 74歳の女性。植木の手入れ中に転倒し、救急搬送された。添え木(芯は金属)が右眼内側に刺さり自己抜去した。創部痛、頭痛、嘔気を訴えている。視力は右0.3(0.8×-2.25D)。眼圧は右22mmHg。細隙灯顕微鏡検査および眼底検査に異常はない。創部の写真を別図36に示す。

まず行うべき検査はどれか。

- a 視野検査
- b 牽引試験
- c 超音波Bモード検査
- d 頭部X線CT検査
- e 眼窩MRI検査

37 24歳の男性。野球の試合中、右眼にボールが当たり視力低下を訴えて来院した。視力は右0.8(矯正不能)。

眼圧は右10mmHg。右眼眼底写真を別図37に示す。

正しいのはどれか。

- a 経過観察
- b 網膜光凝固
- c 抗VEGF薬硝子体内注射
- d 強膜内陥術
- e 硝子体手術

38 55歳の男性。工事現場で作業中、右眼に何かが当たり、視力低下を自覚したため来院した。視力は右0.7(矯正不能)。眼圧は右16mmHg。右眼細隙灯顕微鏡写真と超音波Bモード像を別図38A, 38Bに示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b 眼窩MRI検査
- c 抗菌薬頻回点眼
- d 抗菌薬硝子体内注射
- e 硝子体手術

39 85歳の女性。左眼白内障手術後、眼底に異常所見がみつかり、精査加療のために来院した。視力は左0.3(0.8×-0.50D×cyl-0.50D Ax 90°)。左眼眼底写真と超音波Bモード像およびインドシアニングリーン蛍光眼底造影検査の中期像を別図39A, 39B, 39Cに示す。

診断はどれか。

- a 加齢黄斑変性
- b 転移性脈絡膜腫瘍
- c 限局性脈絡膜血管腫
- d 無色素性脈絡膜母斑
- e 無色素性脈絡膜悪性黒色腫

40 23 歳の女性。1か月前から右眼の視力低下を自覚したため来院した。右眼眼底写真を別図 40 に示す。
適切な対応はどれか。

- a 経過観察 b 網膜光凝固 c 気体網膜復位術 d 強膜内陥術 e 硝子体手術

41 57 歳の男性。苛性ソーダが右眼に飛入し、受傷翌日に来院した。受傷翌日と 7 日後の前眼部写真および生体染色写真を別図 41A, 41B に示す。
現時点での適切な治療はどれか。

- a 輪部移植 b 羊膜移植 c 全層角膜移植 d 表層角膜移植 e 消炎と感染予防

42 75 歳の女性。左眼の視力低下と外出時の羞明を自覚して来院した。視力は左 0.1(0.4 × -2.00 D ⊂ cyl -1.00 D Ax 90°)。眼圧は左 15 mmHg。細隙灯顕微鏡写真と前眼部 OCT 像を別図 42A, 42B に示す。
適切な治療はどれか。

- a EDTA 点眼 b 治療的レーザー角膜除去(PTK) c 角膜表層切除
d 深層層状角膜移植 e 全層角膜移植

43 63 歳の男性。3日前に左眼白内障手術を受けた。手術翌日は裸眼でよく見えたが、昨日から二重に見えるようになったため来院した。視力は左 0.5(1.2 × +1.00 D ⊂ cyl -1.75 D Ax 180°)。角膜乱視は -1.75 D Ax 164°。左眼前眼部徹照写真と角膜屈折力マップを別図 43A, 43B に示す。

適切な治療はどれか。

- a コンタクトレンズ処方 b Nd:YAG レーザー c 眼内レンズ位置修正
d 眼内レンズ交換 e エキシマレーザー屈折矯正手術

44 65 歳の男性。6か月前から左眼の視力低下を自覚して来院した。視力は左 0.8(矯正不能)。細隙灯顕微鏡写真を別図 44 に示す。

適切な治療はどれか。

- a 副腎皮質ステロイド点眼 b Nd:YAG レーザー c 前房洗浄
d 眼内レンズ交換 e 硝子体手術

45 眼科手術時に使用する器具を別図 45 に示す。

この器具を用いる術式はどれか。

- a LASIK b 全層角膜移植術 c 隅角癒着解離術
d トーリック眼内レンズ挿入術 e 涙嚢鼻腔吻合術

46 右眼斜視手術で術者から見た術中写真を別図 46 に示す。

適応となる疾患はどれか。2つ選べ。

- a A型外斜視 b 下斜筋過動 c 固定内斜視 d 交代性上斜位 e Brown 症候群

47 6 歳の女児。眼位異常を訴えて来院した。交代遮閉試験では上方視で 50 プリズム外斜視、下方視で 20 プリズム外斜視がみられた。9方向眼位写真を別図 47 に示す。

適切な治療法はどれか。

- a 右眼の外直筋後転術(上方移動併用)と内直筋短縮術(上方移動併用)
b 右眼の外直筋後転術(下方移動併用)と内直筋短縮術(上方移動併用)
c 両眼の内直筋短縮術(下方移動併用)
d 両眼の外直筋後転術(上方移動併用)
e 両眼の下斜筋後転術(前方移動併用)

48 50歳の男性。糖尿病の既往があり、5年前に近医を受診して糖尿病網膜症と診断されたが放置していた。数か月前から左眼の視力低下を自覚し、数日前にはほとんど見えなくなったため来院した。視力は右1.2(矯正不能)、左0.04(矯正不能)。眼圧は右13mmHg、左20mmHg。両眼の隅角に新生血管はみられない。左眼眼底写真を別図48に示す。

まず行うべき治療はどれか。

- a 抗VEGF薬硝子体内注射
- b トリアムシノロンアセトニド後部テノン囊下注射
- c 網膜光凝固
- d 硝子体手術
- e 線維柱帶切除術と硝子体手術の併用

49 90歳の女性。元来近視が強く、左眼は黄斑円孔網膜剥離で失明している。右眼白内障手術を近医で受けて自覚症状は改善したが、眼底異常を疑われ紹介されて来院した。視力は右0.08($0.7 \times -4.50\text{D} \cap \text{cyl}-1.00\text{D}$ Ax 90°)。右眼眼底写真とOCT像を別図49A、49Bに示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b 胸部X線
- c 眼窩X線CT検査
- d 抗VEGF薬硝子体内注射
- e 硝子体手術

50 78歳の男性。半年前に近医で左眼の白内障手術が施行され、視力は改善したが、数日前から急に見えにくくなり来院した。視力は左0.08(矯正不能)。左眼前眼部写真と眼底写真を別図50A、50Bに示す。

原因裂孔が最も疑われる位置はどれか。

- a 黄斑円孔
- b 2時半周辺部
- c 3時半周辺部
- d 10時半周辺部
- e 12時半周辺部